

＜「方法」と「新・方法」＞講義立会記
—「110のoから成る百獣の王」の作品解説に代えて—

たか（あるくタイプのひきこもり） @10aka_

「方法」と「新・方法」、これらはいずれも自らを成立せしめる単一原理として、同語反復を掲げる活動であった。そしてそれらが同語反復の差し出すどのような性質を見返りに求めるのかと言えば、それは同語反復の必然的に抱える無意味性である。彼らは意味を忌避する。意味とは即ち市場への服従の対価であり、権力への隷属の証書であるからである。無意味を謳う同語反復はしかし、その内側から意味作用の関与を完全に排除したものではない。以下にその所以を解説する。

方法主義者達が使うところの「同語反復」の定義上、反復の前後にある語は「A とは B である」というシニフィアンとシニフィエ、即ち「意味するもの」と「意味されるもの」という関係性が取り結ばれている必要がある（よって、例えば強調表現としての同一語の繰り返しはここでいう同語反復には含まれない）。この翻訳語が提示された時点で既に予見されることではあるが、同語反復という行為それ自身意味作用を内包しているのである。それならば、その同語反復の無意味たる所以は何か。この点の理解の助けに、ロラン・バルトの記号論を引こう。

バルトは象徴と対をなす概念としての表徴（*signe*, シーニュ）を巡る考察を深めたことで知られる。まず象徴とは意味されるものとして唯一無二の上位概念（アイデアと言い換えてもよいだろう）の存在を前提に、その具体的似姿を「象る」ことを希求する作用である。ここで重要なのは、象徴するものが自らのうちに示すことができるのは、飽く迄も超越者たるアイデアの「部分」に留まるという点である。それ故両者の間には単方向的な権力関係が存在する。例えば鳩は平和を象徴する。しかし当然のことながら、鳩という概念単体から平和というアイデアの全体性が示されることはなく、それは飽く迄平和という概念を想起させるトリガーとしての役割に徹するものである。

対して表徴とは、「意味されるもの」を「表す」作用である。両者の間には形式上の相違こそあれ、シニフィアンはシニフィエの全体性をそのまま保持し、伝達するものである。それ故両者の間には等号で結ばれることとなる。再び先の例を挙げれば、「平和」という語は平和という概念と一意に対応する。その様な性質があるからこそ、私達は平和について議論をひとまず始めることができるのだ。そしてこのような性質が重要になってくるのは、一つのシニフィエに複数のシニフィアンが対応する場合である。先述の通り表徴の契りを結んだ両者は等号で結ばれている。このことはつまり、同一のシニフィエと結びついた各シニフィアンの間にも水平的に等号を架け渡せることを意味するのである。

そして以上の理解を前提に、バルトは著書『表徴の帝国』において、独自の日本論を展開した。シニフィアン・シニフィエ間の等価性を謳う表徴作用とて、（もしかしたら奇妙なこ

とに) 多くの場合その作用の行きつく先、意味の終点としてのシニフィエが存在する。しかし(バルトによれば) 日本文化においてはこの意味の終点としてのシニフィエすら存在しない。このような事態が招く現象は以下のようなものである。

表徴作用によって結ばれる二者は、当然シニフィアンとシニフィエとの関係を取り結ぶ。この個別・一時的な関係性を取り出してみれば、それは一方的なものであり、ここまではよい。しかし意味の終点を欠く徹底した等価性故に、両者間を貫く方向性は極めて不安定なものであり、一度は意味の保証を引き受けたシニフィエは次の瞬間にはシニフィアンへと裏返り、ここに表徴作用の逆流が生じる。外部から遮断された水槽の中で対流する水に水流が認められないのと同様に、ここにはもはや現象としての意味作用は存在しない。同語反復はそのような意味で、無意味たりえているのである。即ちこれは意味の中心を欠いたドーナツ型空間と、その表面上で絶えずさざめく意味の横滑りであり、本来あるべきシニフィエを失った「シニフィアンの戯れ」である。

さて、前置きが長くなった。以上の議論を踏まえ、そして直ちに忘却しよう。ここで注目したいのは、先の文言の末尾に転がり出てきた一つの言葉、「シニフィアンの戯れ」の一事に尽きる。世間並の好奇心を持つ者ならば、誰しも一つの着想に行き当たり、心をかき乱すことだろう—「シニフィアンの戯れ」があるのならば、同様に「シニフィエの戯れ」もまた在ってもよいのではないかと。

この無責任な着想に答えるべく、改めて確認しよう。シニフィアンの戯れとは、即ち一つのシニフィエにぶら下がる無数のシニフィアン、それらがその主人たるシニフィエすらも巻き込んで、互いが互いに融通可能の契約を取り結び、等号を架け渡して廻った挙句のシニフィエ無きシニフィアンの相互参照の乱反射であった。ならばその逆を考えればよい。一つのシニフィアンに複数のシニフィエがぶら下がる、それはいかなる状況か。それは一所における複数の意味内容の衝突であり、そのシニフィアンが音声の際には同音異義語、文字の際には同綴異義語と呼ばれる者ども、平たく言えば、駄洒落であった。この「110のoから成る百獣の王」はそのような議論の果てに生まれたのだ。

更に付け加えよう。「方法」と「新・方法」は、「形式ではなく方法への還元によって」同語反復の説明と実践を模索したが、一定の原理に基づいた実践は多くの場合その付随物として一定の形式(即ち定型、公式)を呼び寄せる。本作品は、この結果としての形式を、再び原理としての形式として読み替えることを企図した。それ故この作品の形式は、例えば中ザワによる「金額」、「質量」シリーズに共通して見られる、「a 個から成る b」という形式を、制作の原理として引用した体裁をとっている。

この二つの説明からも確認できるように、本作品は「方法」と「新・方法」の記憶をその成立基盤に据える、極めてポストモダンの、シミュレーションニズム的な作品であると言える。ただしその一方で、それらの記憶を取り払ったところで駄洒落としての機能はそのまま残存することもまた興味深い。

最後に、この作品の外的な事項について、二三記したい。まず、元来夕暮れ時の些末な思い付きに過ぎなかったこの着想を作品という形にまとめるにあたっては、今回の講義で出会った同輩、M女史の後援に因るところが大きい。この場を借りて謝辞を送りたい。

また、同じく同輩であるI女史であるが、本作品を踏み台により発展的な作品の制作を試みているらしい。なんでも図像の要素を取り入れた作品で、私の扱った表徴作用の問題に加えてロゴスとイマージュ、即ち表徴と象徴、或いは再現と類似という対比軸を組み込んだ、大変に意欲的なものらしい。ここに謝辞と応援とを送りたい。

最後にももちろん、この作品と文書の全て、さらに言えば私のこの半年間の振る舞いの大半の発端となった「方法」と「新・方法」の関係者各位への謝辞とともに、この文章を終える。

